英語史における worry の意味変化に関するコーパス調査*

杉　浦　克　哉

キーワード：心理動詞、主題役割、名詞前位修飾、前方照応

1．導入

本論文では worry が表す意味の歴史変化をコーパス調査から得たデータをもとに論じる。*Oxford English Dictionary* online 版（以下 OED）によれば、worry は古英語から前期近代英語では「動物や人ののどを締めて殺す」という意味を表した。そして中英語から後期近代英語にかけて「人や動物を食べ物で窒息させる、歯でのどをつかむ、のどを噛んで殺す・傷つける」という意味も表すようになる。各用例を（1a, b）に示す。このような身体的な意味は（1c）が示すように現代英語で「〈主に犬が〉…をくわえて振り回す」（ジーニアス英和大辞典）として残っている。以下では例文中の worry を太字で表す[1)]。

(1) a. St[r]angulat, wyrgeð uel smorað.
Strangulate, worries, well smore
'Strangulate, (someone/something) **worries**, smores well.'
(OED, c725 (*Corpus Gloss*. S 558))

b. … til iesus þe thrid dai had fughten gain sathan, And werid
… till Jesus the third day had fighten gain Satan, And **worried**
him on his aun bit, …
him on his one bite, …
'… till Jesus had fighten (and) gain Satan on the third day, and (he) worried him, on his

one bite, …’ (OED, *a*1400 (*a*1325) (*Cursor Mundi* (Vesp.) l. 16929))

c. A leading commentator on the criminal law, Professor J. C. Smith, has drawn attention to a situation where a farmer shoots dead an alsatian dog. He may have acted in this way because the dog was **worrying** sheep, or because he wanted to annoy the dog’s owner, or simply because he despises all alsatians.

(BNC, 1985–1994 (*Freedom under Thatcher: civil liberties in modern Britain*. Gearty, C A and Ewing, K D. Oxford: OUP, 1990, pp. 1–117. 1777 s-units.))

現代英語の worry は (2) が示すように「〈人を〉（…のことで）心配させる、悩ませる、苦しめる」等の心理的な意味を主に表す（ジーニアス英和大辞典）。

(2) There’s a lot of stop-start driving and very short journeys which are essential and which are ideal for a diesel. It is also quick enough to get me somewhere in a hurry if I’m called out on an emergency.’ The noise doesn’t **worry** me. Inside the car you don’t even notice it. (BNC, 1985–1994 ([*Daily Telegraph*, elect. edn. of 19920415]. Leisure material, pp. ??. 1451 s-units.))

OED によれば worry の心理的な意味は16世紀末に現れた。

(3) I thought verily they woulde haue **worried** one another with wordes, they were so earnest and vehement. (OED, 1594 (T. NASHE *Vnfortunate Traveller* sig. F2^{v}))

本論文では英語史における worry の分布を調査し発達の経路を明らかにする。Worry は16世紀後半までは身体的意味のみを表したが、16世紀後半からは心理的意味を表すようになり、身体的意味を表す worry はわずかに観察されるのみになる。調査結果から worry に関する 2 つの事実が説明される。第 1 に、心理的意味を表す worry の現在分詞 worrying による名詞前位修飾は19世紀に現れたが、この構造の出現は worry が付与する主題役割に注目することで正しく説明される。第 2 に、現代英語の worry の前方照応の容認度に関する事実は、身体的意味を表す worry の分布に着目することで正しく説明される。

本論文の構成は以下のとおりである。 2 節でコーパス調査に基づき、英語史における worry の各時代の分布を示す。 3 節では 2 節の調査結果に基づき worry に関する 2 つの事実を説明する。始めに心理的意味を表す worry の現在分詞 worrying による名詞前位修飾が19世紀に出現した要因について考察し、次に現代英語の worry の前方照応の容認度について論じる。 4 節は結論である。

2．調査結果

杉浦（2021）は中英語から後期近代英語の worry の分布を調査しているが、worry の異形の調査を行っていないので、本論文では OED と歴史コーパスを用いて worry の異形も含めた調査を行った。調査に使用したコーパスは *The York-Toronto-Helsinki Parsed Corpus of Old English Prose* (YCOE), *Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English,* Second Edition (PPCME2), *The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Early Modern English* (PPCEME), *The Penn-Parsed Corpus of Modern British English*, Second Edition (PPCMBE2), *The York-Helsinki Parsed Corpus of Early English Correspondence* (PCEEC) である[2)]。YCOE, PPCME2からは worry の用例は検出されなかった。また PCEEC では M3, M4, E1から worry の用例は検出されなかった。PPCEME, PPCMBE2からの調査結果を表 1 に、PCEEC からの調査結果を表 2 にそれぞれ示す。

表 1 ：身体的・心理的意味を表す worry の用例数（PPCEME, PPCMBE2）

	E1	E2	E3	L1	L2	L3
身体的意味	0	0	0	0	0	1
心理的意味	1	2	1	1	2	9

表 2 ：身体的・心理的意味を表す
worry の用例数（PCEEC）

	E2	E3
身体的意味	0	2
心理的意味	2	4

表 1 の身体的・心理的意味を表す worry の PPCEME, PPCMBE2からの例を挙げる。(4) は身体的意味を表す worry の PPCMBE2からの例である。

(4) it was something for my puppy teeth to **worry**,
‘it was something for my puppy teeth to worry,’
(PPCMBE2, 1913 (LEATHES-1913-2,19.359))

(5) は前期近代英語の心理的意味を表す worry の PPCEME からの例で、(5a) の were ‘worry’ は心理的意味を表す最初期の例である。(5a) は16世紀中期の例で、OED に記載されている心理的意味を表す worry の最初である (3) と約半世紀の差があるものの、どちらも16世紀の例である。

(5) a. and ys thys my lord of Wynchesteres lyvere that yow **were** nowe?
‘and is this my lord of Winchester liver that you were worrying now?’

(PPCEME, 1555, (MOWNTAYNE-E1-H,201.66))

b. …his disease **wearied** vs all.

'… his disease worried us all' (PPCEME, 1602 (CLOWES-E2-P1,49.298))

c. & hee had like to have **worryed** his mayde:

'and he had like to have worried his maid:'

(PPCEME, 1673−1674 (FOX-E3-P2,109.159))

(6) は後期近代英語の心理的意味を表す worry の PPCMBE2からの例である。

(6) a. There is naught to **worry** ye.

'There is nothing to worry you.'

(PPCMBE2, 1752 (KNYVETON-1752-ACTUALLY-GRAY-1937-2,148.97))

b. but fears that Hunt will **worry** him prodigiously:

'but fears that Hunt will worry him prodigiously'

(PPCMBE2, 181X (MOORE-181X-2,19.689))

c. In fact, it is considered rude for fiance's to **worry** each other with any questions that really matter.

'In fact, it is considered rude for fiancés to worry each other with any questions that really matter.' (PPCMBE2, 1911, (BENNETT-1911-2,38.693))

次に表2の身体的・心理的意味を表す worry の PCEEC からの用例を挙げる。(7) は身体的意味を表す worry の用例である。Worry の主語は the old Serpent 'the old serpent' と考えられることから worry は them (=Christians) を「窒息させる、くわえて引きちぎる」を意味すると思われる。

(7) This is no more then strategem of the old Serpent, to putt Christians into beasts skins and then to **worry** them.

'This is no more than stratagem of the old serpent, to put Christians into beasts' skins and then to worry them.' (PCEEC, 1640−1680 (CONWAY, 235.065.1866))

(8) は PCEEC から得た前期近代英語の心理的意味を表す worry の例である。

(8) a. I am sory I have **wearied** you and myself so long with matters that can not choose but be knowne to you from many better and spedier advertisers,

'I am sorry I have worried you and myself so long with matter that cannot choose but be known to you from many better and speedy advertisers,'

(PCEEC, 1597−1625 (CHAMBER, I, 451.035.1611))

b. but how can I bee witty who am intended this day to bee **worried**!

‘but how can I be witty who am intended this day to be worried’

(PCEEC, 1676–1681 (PETTY, 8.002.35))

表 1 、表 2 から、心理的意味を表す worry の用例は非常に少ないものの E1 以降存在することが分かる。また、身体的意味を表す worry は E3、L3 に存在するのみで、心理的意味に比べると用例数は少ない。

心理的意味を表す worry の主語に着目すると、(5a) は yow ‘you’, (5b) は his disease, (5c) は hee ‘he’ でそれぞれ代名詞、非有生名詞、代名詞である。また、(6a) は naught ‘nothing’, (6b) は Hunt, (6c) は fiance’s ‘fiancés で、それぞれ非有生代名詞、固有名詞、有生名詞である。

3．帰結

2 節の調査結果から 2 つの帰結が導き出される。第 1 に、心理的意味を表す worry の現在分詞 worrying による名詞前位修飾が19世紀に現れたことは、worry が付与する主題役割に着目することで正しく説明される。第 2 に、現代英語の worry の前方照応の容認度に関する事実は、身体的意味を表す worry の分布に着目することで正しく説明される。

3.1. 現在分詞 worrying による名詞前位修飾

心理的意味を表す worry の現在分詞 worrying による名詞前位修飾構造はコーパス調査からは得ることができなかったが、OED の例文検索機能を使うとその初出は (9) である。

(9) Whether she would allow me to send her anything to cheer her up after her **worrying** journey. (OED, 1834 (T. Hook *Gilbert Gurney* xi, in *New Monthly Mag.* 42 470))

(9) の her worrying journey を (10) のような定形節で表すと、worry は主語 The journey に原因または主題の主題役割を、そして目的語 her に経験者の主題役割をそれぞれ付与すると仮定される。

(10) The journey **worried** her.

杉浦（近刊）によれば、please の現在分詞 pleasing が前位修飾する名詞は通常、please から主題の主題役割を付与された非代名詞名詞である。本論文でもこの仮定を一部採用し、心理的意味を表す worry の現在分詞 worrying が前位修飾する名詞は、worry から原因または主題の主題役割を付与された非代名詞名詞であると仮定する。

(9) が19世紀前半の例であることから、心理的意味を表す worry は19世紀前半までに非代名詞名詞を項に取り、原因または主題の主題役割を付与したと予測される。この予測は17世紀初期の例である (5b) の wearied ‘worried’ の主語が非代名詞名詞 his disease であることから正し

いことが示される。心理的意味を表す worry の主語は (5a) が示すように E1では代名詞だったが、(5b) が示すように E2に非代名詞主語も許すようになる。この結果、worrying が名詞を前位修飾する (9) の her worrying journey のような構造が可能になった[3)]。

3.2. Worry の前方照応

目的語に経験者を取る動詞は (11) が示すように前方照応の容認度が極めて低いか、または完全に容認されない。そして、(11a) が示すように worry は他の動詞に比べると容認度が高い。

(11) a.? Politicians depress/worry each other. (Landau (2010: 109))

b.?* John and Mary concern each other. (ibid.: 4)

c.* The men concern each other. (ibid.: 109)

d.?* They frighten themselves. (ibid.)

この容認度の違いは身体的意味を表す worry の分布に着目することで説明される。まず、Landau (2010: 109) は心理動詞の状態性が高いほど、前方照応は容認されにくくなると述べている。彼は (12a, b) の容認度の違いは動詞 startle と concern の状態性の違いにあると述べている。すなわち concern は startle よりも状態性が高いために (12b) は容認されない。

(12) a. John and Mary accidentally startled each other in the dark.

b.* John and Mary rather concerned each other in their youth. (Landau (2010: 109))

この仮定に基づくと、(11a) より (11b, c, d) の方が容認度が低いのは、depress, worry より concern, frighten の方が状態性が高いためということになる。この予測は worry と depress が表す意味の歴史を確かめることで正しく説明される。

1節で述べたように worry は古英語から16世紀後半までは「動物や人ののどを締めて殺す」「人や動物を食べ物で窒息させる、歯でのどをつかむ、のどを噛んで殺す・傷つける」といった身体的意味を表した。この身体的意味は worry が表す動作の対象に身体的な影響を与える際、動作主の意志が関わると思われる。この身体的意味を表す worry は2節の表1、表2で示したとおり16世紀後半以降はほとんど使用されなくなるが、少ないながらもいくつかの例はそれ以降も観察される。そして、現代英語でも (1c) のように worry は身体的意味を表すことがある。これらのことから現代英語の worry は concern, frighten よりも意志性、動作主性が高いゆえ状態性が低く、その結果、(11) のような容認度の違いが生じるのだと思われる[4)]。

また、コーパスや OED 例文を調査すると、each other を目的語に取り前方照応を許す worry の例がいくつか観察される。例を (13) に示す。(13a, b) は *Corpus of Historical American English* (COHA) から得た例で、(13a) は身体的意味を表す worry, (13b) は心理的意味を表す worry の例である。そして (13c) は OED 例文から得た例で worry は心理的意味を表すと思われる。これら

の存在は worry の前方照応の容認度は実際には (11a) よりも高いことを示唆する[5)]。

(13) a. A couple of setter puppies were worrying each other on the sofa beside him,
(COHA, 1885 (*The Hallam Succession*, Barr, Amelia Edith Huddleston, 1831−1919))

b. We are all here to enjoy ourselves, and it is against the rules to worry each other with puzzles. (COHA, 1900 (*The House of Martha*, Stockton, Frank Richard, 1834−1902))

c. They sharpen each other's wits, and worry each other into a proper state of wideawakefulness. (OED, 1887 (M. B. Betham-Edwards *Next of Kin Wanted v*))

また、depress は OED によれば中英語以降に「力で〜を鎮める、〜に打ち勝つ」といった身体的意味を表した。その一方で concern, frighten は身体的意味を表さない。これらの事実から depress は worry と同様、意志性や動作主性を含意していると考えられる。それゆえ状態性が低くなり、concern, frighten よりも前方照応の容認度が高くなると思われる。その結果、(11) のような容認度の違いが生じる。

4．結論

本論文では英語史における worry の分布を調査し、意味変化に焦点を当て発達の経路を示した。Worry は16世紀後半までは身体的意味のみを表したが、16世紀後半からは心理的意味を表すようになる。そして、現代英語に至るまで身体的意味を表す worry はわずかに観察されるのみである。

この調査結果から worry に関する 2 つの事実が正しく説明される。第 1 に、心理的意味を表す worry の現在分詞 worrying による名詞前位修飾は19世紀前半に現れたが、これは心理的意味を表す worry の主語に非代名詞名詞が現れた時期が17世紀初期であることに起因する。

第 2 に、目的語に経験者を取る動詞の前方照応の容認度の違いが説明される。具体的には worry, depress, concern, frighten は前方照応の容認度が非常に低いか、または完全に容認されないが、これらの動詞の中でも worry, depress は concern, frighten と比べると容認度が高い。これは worry がもともと身体的意味を表し現代英語でもわずかながらに身体的意味を表すために使われることに起因する。つまり現代英語の worry は concern, frighten よりも意志性、動作主性が高いゆえ状態性が低く、その結果、concern, frighten より前方照応の容認度が高くなる。

注

*本研究は科学研究費助成事業（若手研究 課題番号：20K13066）の研究成果の一部である。

1）本論文では古・中英語の例文にはグロスと現代英語訳を付ける。前期近代英語の例文と後期近代英語の一

部の例文には現代英語訳のみを付ける。

2）PPCEME, PPCMBE2, PCEEC の時代区分は次のとおりである。E1 (1500–1569), E2 (1570–1639), E3 (1640–1710), L1 (1700–1769), L2 (1770–1839), L3 (1840–1914)。

3）(5b) が17世紀初期、(9) が19世紀前半と両者の間には約 2 世紀もの差がある。このとき、なぜ her worrying journey のような構造がもっと早く現れなかったのかという問題が生じるが、この点は今後の課題とする。

4）意志性、動作主性、状態性の高低については統語的な証拠に基づいた説明が必要であるが、それについては今後の課題とする。

5）コーパスや OED 例文を調査すると、one another を目的語に取り前方照応を許す worry の例が (3) を始めとしていくつか観察される。このことも worry の前方照応の容認度は実際には (11a) よりも高いことを示唆している。

参考文献

Landau, Idan (2010) *The Locative Syntax of Experiencers*, MIT Press, Cambridge, MA.

杉浦 克哉（2021）「目的語経験者動詞 Stun, Worry の出現について」『第 7 回史的英語学研究会」（オンライン開催）.

杉浦 克哉（近刊）「英語史における pleasing の名詞前位修飾構造の出現について」『言語の本質を共時的・通時的に探る：大室剛志教授退職記念論文集』, 開拓社.

コーパス

British National Corpus (BNC)

Corpus of American Historical English (COCA)

Kroch, Anthony, Beatrice Santorini, and Lauren Delfs (2004) *The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Early Modern English*, (PPCEME), University of Pennsylvania, Philadelphia.

Kroch, Anthony, Beatrice Santorini, and Ariel Diertani (2016) *The Penn-Parsed Corpus of Modern British English*, Second Edition (PPCMBE2), University of Pennsylvania, Philadelphia.

Kroch, Anthony, Ann Taylor, and Beatrice Santorini (2000) *The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English*, Second Edition (PPCME2), University of Pennsylvania, Philadelphia.

Taylor, Ann, Arja Nurmi, Anthony Warner, Susan Pintzuk, and Terttu Nevalainen (2006) *The York-Helsinki Parsed Corpus of Early English Correspondence* (PCEEC), University of York, York.

Taylor, Ann, Anthony Warner, Susan Pintzuk, and Frank Beth (2003) *The York-Toronto-Helsinki Parsed Corpus of Old English Prose* (YCOE), University of York, Heslington.

辞書

『ジーニアス英和大辞典』

Oxford English Dictionary (OED), online